

四、ツイミの旅

晴い川面に細い雨が落ちて居る。二枚の手布と携帶テントとを舟底に敷いて一行は舟の人となつた。

ツイミ河は軍司令部の調査に依れば、

- 一、河ハ減水期ハ深サ四〇糎ニ達セズ。流速三米ニ達スル所「ウイルクイン」上下流ニ數ヶ所アリ、船夫下船シ押船ヲ要スル所アリ。

- 二、丸木舟ハ一艘八十貫（船夫共）内外ノ積載量ヲ有シ下江ノ場合二艘ヲ連結セバ二百貫ヲ積載シ得ベシ。

- 三、「デルピンスコエ」「メイナ」間ハ丸木舟ニ依リ下江ニ四日上溯ニ六日ヲ要ス。

- 四、下流ハ小蒸汽艇及ビ發動機艇ノ航行ヲ許ス。

この調査書に依るとデルピンスコエから舟を利用する事が出来る事になるが事實はアダツイミの上流は川底が浅く舟航は不可能なのである、北樺太特有の所謂ポットゾール（ツンドラ）帯は實に此の附近からメイオ海岸に亘る一帯に發達して、美しい河水も漸次にその特質に變ず濁流は滔々として流れるのである。數艘の獨木舟と二艘のアダツイムに居住する朝鮮人と支那人との半底舟は數名の守備隊の人々に送られて下り

始めた。獨木舟は柳の太木を剝り抜き幅二尺七八寸、長さ四間内外で深さは座して腰の位までである。漕手は舳に舵手は艫にゐる。アダツイムからは漸く大河の相を成して來たと云ひ乍ら未だ水勢は激しく瀬よりも瀬の方が多く柳松類の太木が横たわつて航行非常に困難である。河の兩岸は始めドロノキ、キヌヤナギ其他の潤葉樹が繁つてゐたが下流に行くに従つてトドマツの林が暗く繁つてゐる。ところどころの開らけた所にはギリヤークの倉校式の家があつて、土人の子供が立つて見送つてゐる。

ビルホア、コムラオ等のギリヤークの小部落を順に下り、十時頃チーグオと云ふ小部落に上陸する。雨は晴れて陽は濕つた暗緑林と灰色の川面とに漲り始めた。

ギリヤーク

ギリヤークの家は川岸の近くにあつて裏には深いトドマツの密林を控えてゐる。我れ等は此の温順な異人種の風俗や習慣に興味を以て見ていつた。アダツイムギリヤークは此處が根據地で、我等の舟を漕ぐ土人達は多く此處から來てゐる。彼等は北樺太に住む露人を除いた四種族（ギリヤーク、ツングース、オロツコ、ヤクート）中で最も人口多く、一九一二年

出版バトカノフ氏の『西比利亞土人々口統計報告第三冊』に從へば、樺太の彼等は人口一九七一人(男一一一八、女八五三)である。樺太に於ける彼等の分布は北部ではツイミ川、東海岸、西海岸の三群に分れ、南部樺太ではボロナイ河畔に其一團をなしてある。彼等は其の地方別に依つて自稱を異にしてツイミ川居住のものは「ツイミヒン」、東海岸居住者は「ケツト」(西海岸の者は「シヤギヒン」と呼んである。又之等の三群のものは帝政時代のロシアの調査に依ればツイミ川群は九村、東海岸群は二十三村、西海岸群は四十八村と云ふ、彼等をギリヤークと呼ぶのは彼等自身が云ふ名稱ではなくこれに露人特にコサツクが呼び始めたものださうで彼等自らは「ニグアン」(人の義)と云つてあたさうであるが、露人(近時は日本人)の居住地に接近した地位に住する者はギリヤークと呼ばれる爲に彼等自身も又それを用ひてある様である。オロツコは彼等をクギと呼び、アイヌはスメレングルと呼ぶさうで、幕末時代に此の地方を廣く探險した間宮、近藤、松浦、岡本、其の他の諸氏は悉く此のアイヌより聞いたものが先入主となつてスメレングルと稱してゐた。

彼等の人種學上の位置や體質其他を知らんが爲めに暫らく博士島井龍藏先生の記録を借りて云ふならば、身長は餘り高くなく、強壯で胸部は發達し、下肢比較的短く手足は小さい。顔形扁平(或る者は五角形とある)顔骨出で、眼は細く、頬々釣り上り鼻は低く口は大きい。彼等の體質中で特に注意すべきは其の多量なことであつて、この事はギリヤークの人種

分類學上の有力な特徴でもあるさうである。彼等の人種學上の位置は多くの學者達に依つて研究されてゐるが、北海道のアイヌ族の様に全く孤立して他に類似してゐるものはないのである。然し前世紀の中葉に至つて、有名なシュレンク氏はウラル、アルタイ系の民族に對して特に古亞細亞族なる群を設け其中に彼等を包含した。此の古亞細亞族なる名稱は決して自然分類的特徴に依つてなされたものではなく、全く地理的分布の一致や歴史的の其れに依つてなされたもので此の中には、チユクチ、コリヤーク族を始め、エスキモー、カムチヤダール、ギリヤーク、ユカギール、チユヅン、エニセイ、オスチヤツク、アレウト、アイヌ等を包括してゐるのだが、是等の民族のどれもが、形體的の連絡がなく各々が獨立した種屬なのである。シュレンク氏の説に從ふならば、彼等は今日生活してゐる様な極北シベリヤや樺太等の寒土絶人の地に始めから生活してゐたものでなく、何れも南部シベリアの沃地に古くから生活してゐたものであるが、ウラル、アルタイ族(蒙古人其他)の爲に侵入せられ、衝突し、敗北して轉々と退却して遂に今日の様な僻地、寒土氷海の地方に住むの已むなきに至つたものである。

ギリヤークの生活様式は漁業のみであつて、農耕は一切行はず、従つて野菜類は一切口にしない様である。主要食物は勿論魚類で、調理の方法は全くなく、生魚をその儘食する。併し各期の食料としては之等の魚類を貯藏して用ふるのである。原始的民族の多くがそれである様に彼等も亦其味覺が非

常に鈍感で自然が提供したまゝの食物を探つてゐるのである。然し近頃に至つて露人其他の文化人類と接觸するに連れて單純な糖分や鹽分をそれに加味する事を習ひ、小麦粉に魚類を混じた粥の様なものを常食にしてゐるものもある。強烈な刺激物を嗜好して、男女老若を問はず酒と煙草を常に口にする。このツイミ川の舟行者達はよく、漕手であるギリヤークに進航を早めさす一法としてこの煙草の好餌を以て操縦せしめるのである。

彼等は夏と冬とに依つて生活様式が全く異なり、即ち夏は「トルフタフ」と呼ばれる家に住し、冬の家は「トラーフ」と呼ばれる家に住むのである。夏の家「トルフタフ」はトドマツ其他の丸太を以て作られた矩形の倉校式の家屋であつて、床下を四尺位の高さにして、その土臺柱には彼等の唯一の同伴者である目の青い耳の立つた所謂樺太犬を多数につないでゐる。昔の汽船の三等船室の様に天井が狭く入口も亦狭い、居室には珍稀な彫刻物や日常の什器等が置いてあり、女は舟形に削ぐられた搖籠の嬰兒を足で揺り乍ら魚類の燻製を作つたり、衣服を繕つたりしてゐるのである。何れの家にも階段を掛け、入口や干木には色々の彫刻をなしてゐる所もある。川舟を捨てて不用意に繁茂してゐる草木の間に建てられた彼等の家に近づくなれば繩で縛られた多数の犬屬に一勢に吠え立てられて狼狽させられる。犬をこの床木に縛するのほ、索引力を強めて冬期の極を曳かせるのに馴らす處から如斯してゐるらしい。家の周囲の壁には蛙、鱒、海豹等を一面に乾し

てある爲めに、イハイやヒメイハイやニクハイ等の嗜肉性の双翅類が無數に群がつてゐる。多くの場合にこの「トルフタフ」に列んで之と略々同様の建築様式をなして「ニー」と稱する倉庫がある。

秋去り冬來つて河川に於いて食料物の捕獲が不能になれば



食 事 す り ギ ヤー

彼等は夏の家を去つて、犬と共に冬の家「トラーフ」へ移る。「トラーフ」は土を掘つて作られた所謂穴居であつて總て堅穴である。之は多く山深く建てられるもので夏の間に貯藏した食料品の外に極めて原始的な捕獲法を用ひて兎を始めとしてカハチツヤテンや狐等の獸類を捕つて食料にしたたり、衣服の料にした

りするのである。彼等の衣服は毛皮であり、普通犬を用ふる様で、毛の面を表にしてゐる。夏は毛を落したもののや蛙の皮等で作つたものを用ひる。上着は一見支那服に似てゐる首の部分を開く割り

前を全部開いて簡単に合せる爲めに二、三箇所留めてある大きなもので、下着は臍引である。男女共に略々同形であるが女子は少しく優美なものを用ひてゐる。併し露西亞人其他の人種と接觸して來たに連れて羅紗や更紗等を用ひる様になつてこの原始的な固有の衣服は次第に驅逐せらるゝ傾向が見える。近時家にある女子は獨特の刺繡や縫目を施した袍の様なものを用ひてゐる。靴は海豹や蛙等の皮で作つたものを用ひ、冬は犬の皮の手袋を用ふる者もある。

文化人に接したギリヤークは十二、三才の少年から一様に糞れた中折帽をかぶつてゐるのも亦面白い現象である。

彼等は又清潔の觀念に乏しく、その言語には洗面とか、沐浴とかと云ふ言葉は全く有してゐない様に見受けられた。

頭髮は男は辮鬚で女は真中から二つに分けたり、後方で纏んで分けたりしてゐる。女には支那人や露人から求めた銀、ニツタル等の針金に石類や硝子玉等を加工した耳飾りをなしてゐるものもある。

ギリヤークの宗教はシャーマニズム Shamanism である。

即ち此のシャーマニズムと呼ばれる宗教は極端な自然崇拜であつて、太陽、風、水、總ゆる動植物に靈魂が充ち満ちてゐて、地震や、洪水や、火事、饑饉等の天災は主より、病氣や怪我等に、息はされるのは其魂に觸れた結果とせられてゐる彼等の間には生命の流れは、生物、非生物を問はず有機物と無機物との限界がない。

此のシャーマニズムは、西比利亞を始めとして滿洲、中央

亞細亞等に發達かなした極めてプリミチヴの宗教であつて、或學者は此の極北の地に育ぐんだ宗教の根源を氣候に歸して説明する。即ち長い長い冬季の間には萬物を死に陥し入れる吹雪があり、それは飢と恐怖とを産む。その狂暴な自然現象は無智な極北民衆を生氣主義(Aurism)に引き入れると云ふてゐる。

此の靈魂と人間との中間にあるものが巫人であつて、病氣や天災に會つた時には此の巫人が或る儀式に依つて禱り此の惡靈を呼び出す事に依つて救はれるのである。

學者は此のシャーマニズムを職業的シャーマン(Professional shaman)と家族的シャーマン(Family shaman)の二つに分類し、前者を奉ずるものは新シベリヤ族、(フィン、サモエド、ツングース、蒙古、土耳其韃靼等の諸族)で、後者は總て舊シベリヤ族(ギリヤーク、チユクチ、コリヤーク、カムチャダール其他の諸族)に依つて遵奉せられてゐる。職業的シャーマンは、巫人は職業的になつて部落内に存在するが、家族的シャーマンは一家内の何人かゞ之になるのである。この二つのシャーマンを通じて必ず必要とせられるものは太鼓であつてプロフェツシヨナル。シャーマンになると仲々立派なものを持つてゐるらしい。太鼓の音は善靈の神は喜び、惡靈の神は之を恐れて逃げ去ると云ふので之を用ひるのであるギリヤークの屬するアレアシヤートの家族的シャーマンは職業的シャーマンの太鼓が家々に一個づゝあるに反して一部落に一個とか乃至は二、三の部落を通じて一個しかなく必要

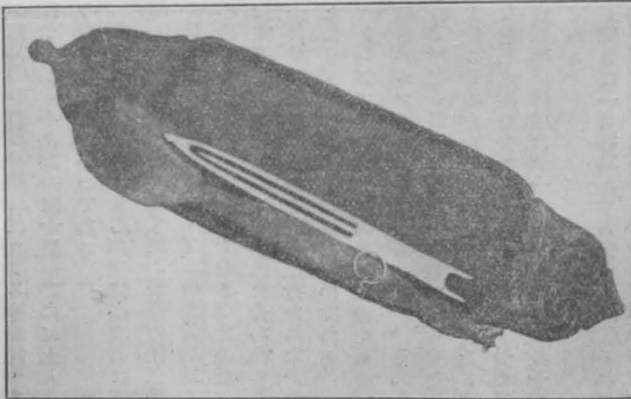
に應じて之を持つて来て用ふる様にしてゐるのである。併その靈魂(Spirit)に憑れる者は男であるか、女であるかとの問題であるが、元始的な家族的シャーマンに屬するものは女の方に威力があるとせられ特に處女が非常に優れた位置に立つてゐるのである。併し之が進化して家族的のそれを離れて職業的になるに従つて男の方に移つて來た。それは生活様式が複雑化して來るに従つてその儀式も六ヶ敷くなり祝詞の様なものも女の力では不充分になるので男に移つたらしいと言ふ説が定説になつてゐる。

不幸にして私の訪づれた幾多のギリヤークの部落中にはそれに用ふる太鼓を見た事はないが、彼等が之に用ふる太鼓はアーバンと稱して海豹の皮や馴鹿の皮を張つたものを用ふると言はれてゐる。

家屋や、舟や其他の事に用ふる爲に彼等は木を倒す。彼等の眼に見へる山、川、動植物その他一切の現象は、總て精靈が假面を被つてゐるものだから之等を伐り、又は獲る時には決して無意識になす事を許されぬ。彼等は木を伐つた代償としてその靈にイナオを捧げて祭るのである。(トーチム)之は私達の船夫である年老ひた土人が天幕や舟の修繕をなす時に伐つて來る小さな立木にさへも本式な禱りこそしなかつたが、その氣持を充分捧げてなす事をしばしば目撃した。

永い間アダツイミの守備隊に駐在してゐる我等の案内役であるS一等卒の話に依ると、彼等の仲間に病人が出來ると祈

禱者は病者の前に木片を細かに削つたイナオを立てアーバンを粉かに敲き乍ら低く咒文を唱へ、神掛りの状態になると奇祭を舉げ、太鼓を亂打し、果ては口に焚き火を噛み遂に昏倒してしまふ相である。



(盆、子杓、針網、輪耳) 品俗土のグーヤリギ

私達は彼等の生活状態や土俗品を見るべく低い階段を登つて薄暗い家の中へ入ると、梁から絲を以て釣るした異様な搖籃に可憐な嬰兒が心地よげに眠つてゐるのを見た。その母らしい若い女は着物の襟飾りらしい

赤や青の小布を散らかして熱心に縫取りをしてゐる。家の中には馴鹿や犬の皮を敷いて什器や衣服やその他の雜用品がばいばいに散らばつてゐる。生れ落ちると用意せられてある幅一

尺五寸位に長さ二尺五寸位の木を薄く舟形に削られた板に縛り付けられ朝から夜まで釣るされ通しにして育てられるのがギリヤークの嬰兒達である。

此の子釣舟に入れられた嬰兒は上から紐でぐるぐる縛られて身體の動きが全くとれないのであるが、泣きもせず時々與へられる母の乳に満足して吊るされてゐる。乳を與へる時でも多くは吊り繩を解いたのみで縛つた儘で飲ませる。陰鬱な樂天家である彼等にも感覺藝術を持つてゐる。簡単に木片を組合せた「アルガン」と云ふものや鐵片を組合せた「ライトホン」と云ふ吹奏器や一見グライオリンの様な馬の尻尾で作つた弓を以てひくツイクリンと云ふ弦奏器がある。短かい極北の夏の夜を之等の元始的な樂器に合して單調なそして暗い哀傷的な牧歌が、白樺の樹皮が燃えてゐるトルフタフの影や獨木舟を護つて河邊に蚊やりをしながらうすくまる天幕の中から私達は親しく聞いたのであつた。

此の部落で同僚のK君は土俗學や考古學や人類學に詳ばしいその父上の土産にする彼等の土産品をアルコホルやナイフ等の所持品と交換し、私も簡単な覺書やスケッチをして再びび下へ下へと舟を滑べらせた。

※ ※ ※

私達の乗つた獨木舟にはハツカンとヤルガンと云ふ十二才に十四才位の少年が舵手と艘手であつて淺瀬や倒木等の危険區域にさゝかゝると奇聲を擧げては難關を越えて行く。輕やかに廻るがへしてヘリモンやマテハやシジミ等の蝶類が

河を渡つてゐる。舟は一時過ぎて左岸のギリヤークの部落であるワキルキルンへ着いた。河岸の土人の家の前に上陸して晝餵を探る。此處には露人の家が二、三軒あつて、山羊や牛や鷺鳥等を飼ひ、畑にはカラス麥が繁つてゐた。此處から河口であるメイオ迄約四十里の間には土人の部落の他には一軒の露人の家もないのである。

小憩の後舟は再び進んだ。河は次第に深くなつて倒木や淺瀬も少なくなり安心して思ふが儘の眺望をなす事が出来る。今日の泊り場であるプープニの繫留場近くになると美しく小砂礫の敷かれた洲が多くなる。此の洲はこの舟行には非常な重要なものであつて、遅れた舟を待ち合せたり、晝食を取つたり、種々な都合で驛舎迄行かれないかつた場合にキャンプしたりするのに非常に便利なのである。

ウシアブやゴマフアブ其他の吸血昆蟲が盛んに舟を追つて来る。ネットを持つて居るのだが、それを使へば舟が危ないのでひどく惱まされたが、商賣がらでそれを一つづつ毒瓶に入れるものだから他の連中が笑つてゐる。この様にして呑氣な然し危険な舟行も五時半にはようやくプープニの繫留所へ着く事が出来た。十時間を費やして約十三里程を下り得たのである。

明日は一日採集をする豫定なのでそれに必要な用具を取り出したりして隙取つてゐる間に早、ギリヤークや露人や朝鮮人は河岸に簡単な天幕を張り、焚火をなし夕餉の用意を始めた。附近一帯は熊の襲撃のおそれがあるので彼等は夜中一

ばい焚火だけは絶やさないのである。

案内者の三名の兵士の人を中心にして爪先上りの路とは名ばかりの暗い林道を各自が懐中電燈を頼りにして驛舎へ向つた。一面に敷きつめられた蘚苔類の上を心細い思ひをしながらたどり行けばシヤクトリやヤガの類が手に持った燈を慕つて何處までもついて来る。ホットゾール特有の氣味の悪い水溜りが絶えず現はれる。蚊は群をなして襲ふ。さしもの元氣な一行も一同無音の苦愁を嘗めて十五六町の道をようやく驛舎に着いた。

驛舎と云つても密林中の稍平坦な所を切り開いて丸木を以て建てられたバラックでほんの雨露をしのぐに過ぎない位の家である。然し不自由な河舟生活をなして来た者には何程の慰安になるか知れない。驛舎には三名の電信隊の兵士が交代で駐在し、森林中に架したメイオ、アダツイム間の状況を此のブープニと次のバルカタの兩驛舎とで中繼をなしたりこの區間の電線を監督したりしてゐるのである。冷たくなつた身體を驛舎を離れて小溪の側に建てられた風呂にひたり、駐在する三名の兵士達の心盡しの夕餼を終つて一同は深い眠りに落ちて行つた。

八月八日曇り。

驛舎の周圍は大木が伐られてあるので、日當りが非常によく、従つて小灌木や可憐な花を持つてゐるリンネサウ *Linnæa borealis*、ヤミヤマソスナグサ *Myosotis silvatica* Hoffm 等が陽をいづばいに浴びてゐる。露とそして花粉と

が慕つては色々な蝶類が夥ただしく集まつてゐる。朝餼を終ると直ぐに私はK君と共にこのめづまれた絶好の採集地を熱心に採集して廻つた。特に青葉峠には餘り見なかつたクモマヘニヒカゲが非常に多く飛翔してゐるのが目に付く。

採集の歸り、明るく陽の透るトドマツの幹に二匹の可憐なトヲフネヅミ *Eutamias asiaticus* Gmel の夫婦が遊んでゐるのを見た。

夜間採集をやる考だつたので私は一同と別れて午後はゆつくり休養して暗くなると直ぐに附近の坂路でランプを點じたがもう月が出てゐたので、思つた程の成功を見なかつた。それでもナミシヤク亞科 *Larinitae* で二、三の變つたものを採ることが出来た。(未完)

摘 録

○小藤文次郎博士 大正十四年但馬地震 (The Tazuma Earthquake of 1925. Jour. Facult. University of Tokyô, Section II. Vol. II. part I, 1926.) 地形、地質構造上から中國は東西に走る支那内帶の崑崙秦嶺山系の延長で、又一面には九州南部と共に、南東支那とも地質的聯關がある、リヒトホーフエン、ナウマン、原田の諸氏は南日本の基礎構造の線を、福建、廣東の支那系の延長と考へ、ロツチト氏は南日本迄秦嶺の延長としたが、何れも其東海に没した後を明にし